

教理研究院

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(12)

UCI(いわゆる「郭グループ」)の言説の誤りについて指摘してきましたが、当連載の第6回で掲載した「櫻井節子氏による『信仰告白』の映像の問題点」で指摘したことに対し、「顕進様を支持する有志の会」が「教理研究院への公開質問および櫻井夫人に関する公文への反論」を発表しました。今回は、その「反論」の内容に見る、彼らの言説の問題点を指摘します。

教理研究院

注、真の父母様のみ言および『原理講論』は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

十五、「顕進様を支持する有志の会」(UCI側)の反論の問題点

(1) 神の創造目的のその中心は「真の父母」である

① UCI側の「三位一体」に関する不正確な理解

UCI側の問題点は、「実体的な三位一体」に関して、誤った観点からみ言を解釈し、「真の家庭」を定義するところにあります。彼らは、次のように反論しています。

「最近の家庭連合では『三位一体』という言葉を持ち出して真の父母様の価値のみを大きく

強調しますが、『三位一体』の目的は、実体の四位基台を完成させることではないですか？そして、家庭連合では真の子女様の価値をどのように考えるのでしょうか？」

このように、UCI側は「三位一体」の目的を「実体の四位基台を完成させること」であるとし、家庭連合は「真の父母様の価値のみを大きく強調し」といって批判します。この批判は「三位一体」の不正確な理解から生じているものです。『原理

講論』は「三位一体」について次のように論じています。

「イエスと聖霊は、神を中心として一体となるのであるが、これがすなわち三位一体なのである」(267ページ)

「イエスと聖霊とは、神を中心とする霊的な三位一体をつくることによって、霊的眞の父母の使命を果たしただけで終わつた」(268ページ)

「ゆえに、イエスは自ら神を中心とする実体的な三位一体をつくり、霊肉共に眞の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らをして原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせるために再臨される」(同)

『原理講論』は、霊的三位一体について「イエスと聖霊は、神を中心として一体となる」と定義します。すなわち、神を中心としたイエスと聖霊の一体を霊的三位一体と言うのです。

ところが、霊的三位一体は「霊的眞の父母の使命」を果たしただけで終わったため、「墮落人間を霊肉共に重生させ」るには

「実体的な三位一体」である霊肉共の、「真の父母」が再臨されなければならぬというのです。したがって、「実体的な三位一体」とは、イエス様の再臨として来られる「眞のアダム」と聖霊の実体である「眞のエバ」

(眞の母)が、神様を中心として一体を成すことを意味します。以上のように、『原理講論』が定義する「実体的な三位一体」は、眞の子女様の存在について述べていません。

② 「重生論」と密接に関係する「三位一体論」

眞の子女様の価値を『原理講論』の「三位一体論」から見ると、次のようになります。

「神がアダムとエバを創造された目的は、彼らを人類の眞の

父母に立て……神を中心とした四位基台をつくり、三位一体をなさしめるところにあった。もし、彼らが墮落しないで完成し、神を中心として、眞の父母としての三位一体をつくり、善の子女を生み殖やしたならば、彼らの子孫も、やはり、神を中心とする善の夫婦となつて、各々三位一体をなしたはずである。したがって、神の三大祝福完成による地上天国は、そのとき、既に完成されたはずであった」(267ページ)

『原理講論』は、「神がアダムとエバを創造された目的は、彼らを人類の眞の父母に立て……神を中心とした四位基台をつくり、三位一体をなさしめるところにあった」と論じています。その場合、アダムとエバが「神を中心として、眞の父母としての三位一体」をつくり、そして「善の子女」を生み殖やしたならば、その「子孫も……神を中心

とする善の夫婦」となり、「各々三位一体をなしたはず」と述べています。この三位一体論に基づいて眞の子女様の価値を原理的に見れば、「神を中心とする善の夫婦となつて、各々三位一体」を成す存在と言えます。上述のことから、「実体的な三位一体」とは「人類の眞の父母」を指しており、それに続く「各々三位一体」は、眞の子女様家庭および祝福家庭であることが分かります。

ここで「眞の父母としての三位一体をつくり、善の子女を生み殖やしたならば……」とあるように、アダムとエバは三位一体を成した上で、子女を生み殖やさなければなりません。UCI側が述べる『三位一体』の目的は、実体の四位基台を完成させることではないですか？という内容も、三位一体を成した上で、そこに含まれます。しかし、そのことは、単に子女を生み殖やすというのではあ

りません。まず、神様を中心とした実体的な三位一体を成した上で、子女を生み殖やさなければなりません。「実体的な三位一体」とは、前項で述べたように、眞のアダムと眞のエバが神様を中心として一体を成すことを意味します。それを踏まえた上で『原理講論』は次のように論じます。

「もし、彼ら(アダムとエバ)が墮落しないで完成し、神を中心として、眞の父母としての三位一体をつくり、善の子女を生み殖やしたならば、彼らの子孫も……神を中心とする善の夫婦となつて……地上天国は……完成されたはずであった。しかし、アダムとエバが墮落して、サタンを中心として四位基台を造成したので、サタンを中心とする三位一体となつてしまった。ゆえに彼らの子孫も……サタンを中心として三位一体を形成して、墮落した人間社会をつくつてし

まった」(267ページ)

この論述は極めて重要です。人間始祖アダムとエバが、神様を中心に「三位一体」をつくるのか、サタンを中心に「三位一体」をつくるのかで、天国になるか、地獄になるか、地獄になってしまうのか、が決定されるといいます。

すなわち、アダムとエバが神を中心し、三位一体をつくれば、遺伝の法則によってその子孫は、サタンの血統になつてしまふのです。天国になるか、地獄になるかの分岐点、人間始祖アダムとエバの「三位一体」の問題だったのです。そういう意味で、アダムとエバは特別な使命を持つ人物だったのであり、彼らがどういう立場で「三位一体」をつくるのかで、み旨が立ちますれば倒れもするのです。

したがって、UCI側が述べる「最近の家庭連合では『三位一体』という言葉を持ち出して真の父母様の価値を大きく強調しますが、『三位一体』の目的は、実体の四位基台を完成させることではないですか？」との主張は、三位一体に対する表層的理解にすぎず、人間始祖が「実体的な三位一体」をつくって人類の真の父母になる事の重大性が認識できていないものと言わざるをえません。

以上の内容を踏まえて、『原理講論』は、墮落人間に対する「重生」について次のように論じています。

「イエスと聖霊とは、神を中心とする霊的な三位一体をつくることによって、霊的眞の父母の使命を果たしただけで終わって……霊的子女の立場にとどまっているのである。ゆえに、イエスは自ら神を中心とする実体的

な三位一体をつくり、霊肉共に眞の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、彼らをして原罪を清算させて、神を中心とする実体的な三位一体をつくらせるために再臨される」(268ページ)

眞の父母様が、神を中心に「実体的な三位一体」をつくり、「霊肉共の眞の父母」となることで、「墮落人間を霊肉共に重生させ……神を中心とする実体的な三位一体をつくらせるために再臨される」というのです。

このように、「重生論」と「三位一体論」は密接に関係しており、両者は切り離して論じることができない内容であることを知らなければなりません。『原理講論』が論じる「三位一体の目的」は、UCI側の述べる、ただ単に「実体の四位基台を完成させること」というものではありません。

父母の願いを受けることができないうならば、神様の願う四位基台の完成とは言えません。

さらに、『原理講論』は、人間始祖アダムとエバが夫婦として完成したその位置について次のように論じています。

「アダムがもし完成したならば、彼は被造物のすべての存在が備えている主體的なものを総合した実体相となり、エバが完成したならば、彼女は被造物すべての存在が備えている対象的なものを総合した実体相となる」という結論を、直ちに得ることができ……彼らが夫婦となつて一体となつたならば、それがまさしく、主体と対象とに構成されている被造世界の全体を主管する中心体となるべきであつた……アダムとエバが完成された夫婦として、一体となつたその位置が、正に愛の主体である人間と、美の対象である人間とが一体化して、創造目的を完成した善の中心となる位置な

注視すべき点は、眞のお父様が「その目的の中心は誰でしょうか」と問われ、「アダムとエバでした」と語っておられる箇所です。アダムとエバとは眞の父母様のことです。お父様が「神様を中心としてアダムとエバが夫婦の愛で一体となり、神様の愛の圏から離れられなくなります」と語っておられるように、神を中心、まず夫婦が完全一体(実体的な三位一体)とならなければなりません。当然、眞のお父様が「神様のみ旨は四位基台を完成することです」と語っておられるように、四位基台が重要であることは言うまでもありません。しかし、神様の願う四位基台を成し遂げるには、「実体的な三位一体」が最も重要です。そして、四位基台完成における子女は、眞の夫婦、眞の父母である勝利されたアダムとエバの願いを完全に受けられてこそ、その価値を現すことができるのです。子女が、

③創造目的のその中心は「眞の父母」である

人間始祖アダムとエバが完成し、神様を中心とした「実体的な三位一体」を成して、その上で彼らは子女を繁殖し、家庭的な四位基台を築かなければなりませんでした。眞のお父様は、神のみ旨に対して次のように定義しておられます。

「私が神様のみ旨に対して定義をしてみましよう。私は、神様のみ旨とは『創造理想を完成すること』だと定義を下します。……統一教会の言葉を使つて言うならば、神様のみ旨は四位基台を完成することです。

統一教会で見る神様のみ旨、すなわちレバランド・ムーアが知っている神様のみ旨とは何でしょうか。それは神様が宇宙をつくつた創造理想、すなわち創造目的を完成することです。神様はすべての被造物を創造するとき、必ず目的をもって創造

するのである。ここにおいて、初めて父母なる神は、子女として完成された人間に臨在されて、永遠に安息されるようになる……ここにおいて初めて、神のみ言が実体として完成するので、これが正に眞理の中心となり……人間をして創造目的を指向するように導いてくれる本心の中心ともなる」(60～61ページ)

以上のように、『原理講論』は、完成したアダムとエバ(夫婦)の位置は「被造世界の全体を主管する中心体」、「創造目的を完成した善の中心」、「(神が)永遠に安息される」、「神のみ言が実体として完成」、「眞理の中心」、「本心の中心」等々と論じます。このように、実体的な三位一体を完成したアダムとエバ(夫婦)の位置は、強調しても強調しすぎることがないほど、極めて「重要な位置」である事実を知らなければなりません。したがって、UCI側が述べ

されたので、そのような神様の創造目的を成すことが神様のみ旨です。その目的の中心は誰でしょうか。アダムとエバでした。それゆえに私は、創造の理想を実現すること、すなわちアダムとエバを中心とした理想を実現することが、神様の創造目的だと見るのです。

では、その理想実現とは何でしょうか。それはまさに四位基台を成すことです。四位基台とは、神様を中心とするアダムとエバが、神様の愛の圏で離れようとしても離れられないように完全に一つとなり、理想的な夫婦となり、彼らが子女を繁殖することによってつくられる神様中心の家庭の基台をいいます。この四位基台が造成されれば、神様を中心としてアダムとエバが夫婦の愛で一体となり、神様の愛の圏から離れられなくなります」(祝福家庭と理想天国(1) 402～403ページ)

「最近の家庭連合では『三位一体』という言葉を持ち出して眞の父母様の価値を大きく強調」という批判は、「眞の父母」という概念を持つ意義と価値が、いかに大きなものであるかという事実を分らず、それを批判しているものと言わざるをえません。

(2)UCI側の言説は家庭の概念に「夫婦」の存在が欠けている

①家庭とは、「子女があつての父母」なのか？

UCI側が主張する「家庭」の概念には、「夫婦」というものがあります。まず、問題となる彼らの反論における「家庭の定義」の箇所を引用します。

「家庭と言ふものは父母があつての子女であり、子女があつての父母です」

眞のお父様は次のように語っておられます。

「絶対『性』を中心とするア

